ポール・ド・マン（土田知則訳）『読むことのアレゴリー』
（岩波書店、2012年）

金　志成

まるで不向きだった専攻の学部をうっかり手ぶらで卒業してしまい、とりあえずモラトリアムを延長するためだけにドイツ語もドイツ文学も一切知らぬ亡命詐欺師のような格好で早稲田の独文コースに学士編入した私にとって、文学作品の論じ方というのは長らく大きな謎であった。一年生から文学部にいればきっと手取り足取り教えてくれるのだろうと勝手に羨ましく思っていたが、どうやらそういうわけでもないらしい。

しばらく経って気づいたのは、材料を流し込めば自動的に論文に仕上げてくれる型のようなものがあるわけではなく、論文を書くには型そのものを自分で作らなくてはならないということだった。もちろん無から創造するわけにはいかないので、まずは世で「論文」と呼ばれている文章をあれこれ読みつつ、見よう見まねで捏ねてみる。できればじっくり時間をかけて成形したいところだが、最終的な形も出来上がるタイミングも計算できるものではない。さながら私にとってポール・ド・マンとの出会いは、まだろくろを回している最中に突然思いもよらぬ方向に成形され超高温で焼き固められたようなものだった。

『読むことのアレゴリー』の邦訳は私が修士課程二年目の年に出版された。ルソー、ニーチェ、プルーストらの「比喩的言語」について論じたド・マンの主著であるが、扱われている対象に明るかったわけでもないので、内容をきちんと理解できたとは言い難い。それにもかかわらず、あるいはまさにそれゆえに、彼の書き方というかスタイルそのものに純粋な衝撃と影響を受けてしまった。ド・マンはテクストの秘孔を突いた。テクストの周縁や末節にそっと触れるだけで、全体の読み方を反転――ときに崩壊すら――させることができた。そんなことができるのかと、そんなことをしてもいいのかと、素朴に驚いた。当時日本語で読めた著作はすべて読み、関連トークイベントなどにも足を運んだ。ド・マンもまた横領罪その他を逃れてアメリカにやってきた詐欺師のような人間であると知り、ますます縁を感じた。

むろんそれでド・マンみたいに書けるようになったわけではない。元がろくに乾燥も素焼きもせず無理に焼き固めた脆い型である。何かの拍子にあっさり壊れ、論文の書き方がますますわからなくなり、その責任をド・マンになすりつけるために『こわれがめ』のアダムの気分でこの小文を書いた。